

第 1 回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「がんばりすぎなくていいよ。」

兵庫県

神戸星城高等学校 2 年

松本 みなみ

がんばりすぎなくていいよ。

神戸星城高等学校 二年

松本 みなみ

私はよく悩みがなさそうと言われる。もちろん私にも悩みの一つや二つはある。私には母という良き理解者がいる。母が私に言った「がんばりすぎなくていいよ」という言葉がいまでも心に残っている。

中学一年の十一月。私は四十度の熱を出した。初めは何の病気が分からなくて入退院を繰り返した。部活動もしていたため病気について考える暇もなかった。

中学二年の七月。体調は落ちつき、部活動ではキャプテンになり、充実した日々を送っていた。だが、医者から手術をしなければならぬと言われた。頭の中は真っ白になり、どうしていいのか分からなくなった。手術は初めてではないが、大きな手術はこれが初めてだった。一カ月後無事手術は終わった。麻酔から覚めてからは痛いことばかりだった。手術後の三日間は動けなくて、歩くこともできなかった。せきしてもなにしても痛くて、一生病院から出られないかもしれない。一生歩けないかもしれない。退院後も食事は取れないし、部活動には参加できないし、手術した所は痛いし、本当につらいことばかりだった。この頃だった。母が私に口ぐせのように「がんばりすぎなくていいよ」と言うようになったのは。

母はとても気をつかう人で、いつもいつも私のことを心配してくれていた。そんな母は支えであり、かけがえのない存在だった。私が入院しているとき、母は少しやせた。家から病院は遠いし、家には祖父がいる。食事を作らないといけないし、相当しんどかったと思う。だが、母は弱音を吐かず、毎日病院にお見舞いに来てくれた。姉も兄も母が家に居なくて我慢したこともたくさんあったと思う。

高校二年生になった今、よく中学校時代のことを思いだす。

「がんばりすぎなくていいよ」

すごく曖昧な言葉だけど心に残る。この言葉を聞くと、肩にのっている荷物がふっと軽くなる。そう思うのは私だけかもしれないが、本当に良い言葉だと思う。ありがとうやごめんも大切な言葉だと思う。でも、つらい時、眠れなくなるまで悩んだ時も助けてくれたのは、「がんばりすぎなくていいよ」という励ましの言葉だった。

これから、もっともつとつらいこと、悲しいことがあると思う。そういう時はある程度がんばって、少し休憩して、またがんばろうと思う。

母は今でも私の良き相談相手だ。悩んでいること、楽しいこと、うれしいこと、どうでもよい話をしている。今がとても幸せで、改めて母の偉大さ大切さを実感している。私も、いつか母のように心から相手の気持ちを考えて、アドバイスできるような素敵な人になりたい。そのために今は様々な人と話して、コミュニケーション能力を高めていきたいと思う。